



発行所  
三池炭鉱労働組合  
大牟田市入船町1番地  
電話(53)3033-4  
編集兼 田口芳博  
半年間 1,800円 送料共  
振替口座番号  
労働金庫大牟田支店  
825-0000569

### うしき

- 9月6日 合理化反対同盟集会
- 7日 合理化反対大牟田集会
- 8日 合理化山元交渉
- 9日 第17回委員会
- 10日 合理化反対全員集会
- 11日 重大災害抗議時限スト
- 11日 炭労中央委員会
- 12日 重大災害臨時ビラ配布
- 13日 炭労臨時大会
- 13日 幌内閉山反対中央行動
- 14日 衆議院石炭特別委員会

## 労働者を犠牲にする合理化許さず

# 山元交渉へ全力

三年連続の生産縮小と、それに伴う七百七十七人(下請けを含めると千人程度)の人員削減合理化は、三池労組や地域あげての反対にもかかわらず、ほぼ提案どおりの内容で新労組・職組との間で「基本的に合意」され、希望退職募集期間を経て、今後の問題をめぐって九月八日、山元交渉が開かれました。しかし、出向・配転など大綱的な提案にとどまり、今後中旬以降さらに交渉が続けられることになりました。

### 配転職変が焦点に

八月二十三日から三十一日まで、出向派遣の予定が大幅に減り、山元交渉の中心は十月三日からの坑口統合に向けて、大幅な配転職変と職名変更が焦点になってきました。計五百三十九人が退職に応じ、坑内を中心とする外に多かったです。八日の山元交渉で会社の態度と、



3年連続の合理化が強行されるまで、今後のたたかひの意思統一をおこなった全員集会(9月10日)

三年連続の合理化(希望退職・出向・坑口統合)をめぐる中央交渉が八月十七日からおこなわれてきたが、社会的・道義的責任をかねて捨てた会社側の不遜な態度によって十九日午後三時三十分決裂(号外で既報)、三池労組は合理化強行に抗議して十九日二十四時間ストライキに突入しました。また、新労組と職組は若干の条件引き上げを基本的合意し、三年連続の合理化を受け入れませんでした。

## 合理化中央交渉は決裂

### 三池労組、抗議の24時間スト突入

#### 会社の最終回答(要旨)

- 希望退職については、募集は二十三日から三十一日までとし、退職日は受付の日から十日後とする。
- 募集に当たっては、本人の自由意思を尊重する。
- 最低補償額は二百三十万円(提案通り、ただし七十万円を組合に一括支給)とする。
- 五十二歳以上の者は定年扱

#### いとし、勤続年数は定年までの残期間を通算する。

- 退職慰労金は十万円とする。
- 期間中の応募者には、期末手当見合い分として二十万円を支給する。
- その他は提案通り。
- 出向派遣については、一、対象者中、真にやむを得ない事情のある場合は別途検討する。
- 出向派遣期間は一年とする。
- 就業条件、賃金・期末手当、退職手当、その他については省略。

## 第一鉱で重大災害発生

### 三池労組、時限ストで抗議

九月十日午前八時十分ごろ、第一保安確保を要求して十一日各第一二鉱(旧有明鉱)上層西二十脚東時間五十分の時限ストライキに突四片折ヘッド部で発破事故が発生入りました。

この災害は、三年連続の合理化が進行される中で発生したもので、労働者を犠牲にする合理化をやめ、安心して働ける職場をつくれー、重大災害に抗議する「ビラ」を第一二日に緊急に保安確保の申し入れを、原因究明と対策など六項目を要求して保安団

## 幌内閉山反対闘争で炭労臨時大会開く

北炭(北海道炭産汽船・本社東縮小してでも存続する。などを要求して提案の撤回を求めて、ストライキ集会、炭労全山のストライキ、座り込み、全道集会、中央要請行動などを続けてきました。幌内炭鉱の人員は千九百人。提案では閉山に伴って全員を解雇し、再雇用問題は新規事業で八百人程度を吸収したいとしています。

### 北炭幌内炭鉱を 守れと全道集会

「ヤマの灯を消すな」「地域崩壊につながる閉山反対」などをスローガンに、北炭幌内閉山反対全道集会が三日、地元三笠市中央公園で開かれました。この集会は道産炭地域振興対策協議会、三笠市民会議、道炭労、全道労協が主催し、三笠、夕張、芦別、赤平、歌志内の各市長も参加。北炭の社会的責任の放棄と、石炭つぎしの政策を進める政府・自民党をきびしく批判し、幌内炭鉱の存続を強く訴えました。

## 地底

三年連続の希望退職だからそんなに出るはずはない。というのが大方の見方であったが、実際には予想外に出た。会社の正式発表では五百三十九人。新聞報道では五百六十八人。まだやめていない数も含む?

募集に当たっては、本人の意思を尊重する」としたが、管理職が「呼び出し」をかけ、出向をちらつかせての説得があった。明らかに「肩たたき」「干渉」の実例はゴマンとある。だが好んでやるものか。「あなたは戦力外」だといわれれば、悩み、苦し

み抜いた上で応じたのであろう。希望退職という名の解雇だった。三池炭鉱の将来展望についてはまったく闇の中。三百万トン(年間出炭量に匹敵)の貯炭解消策もない。五十二歳以上の定年退職先取り、若年層の「首切り」は退職金の安上がりで済まない。展望を失えば、見切りをつけることにもなる。これは「生き残り」ではなく「撤退への一里塚」ではないか。

「政策だからやむを得ない」と被害者である会社に、「これもやむなし」と怒りない面々。現場の声を傾けることこそ重要なとき。組合員の雇用と生活を守る視点を失っては、その存在価値がない。真の「生き残り」のために八次策に抗議したたかひ、九次策への展望をきり開いていくことこそ当面の課題である。

海外炭と国内炭の価格差を前提とする「経済合理性」構造調整政策一は、国内石炭政策の「死に至る道」ではない。食料自給率の低下とともにエネルギー自給率の低下は、わが国の安全保障を根柢から揺がすことは明らかであり、これは日米安保体制の経済的側面からの「切断面」をきびやかに露呈している。



全道集会後のデモ行進